

《研究ノート》

『共感の力』——アメリカ最初の小説

齋藤 忠利

アメリカ最初の小説とされるウィリアム・ヒル・ブラウン

(William Hill Brown) (一七六五—一七九三) の『共感の力』[※]は自然の情の勝利』(The Power of Sympathy: or, The Triumph of Nature) (一七八九) は、その出版後、百年以上もの間その存在が忘れられ、またその作者は誤って、同世代の女流詩人セアラ・ウェントワース・モートン夫人 (Mrs. Sarah Wentworth Morton) (?—一七五九—一八四六) とされてきた。もちろん、それにはそれなりの理由があつて、先ず第一には、この作品が匿名で出版されたこと——初版は、一七八九年の一月、二冊本の形で、ボストンのアイゼイア・トマス・アンド・カンパニー (Isaiah Thomas and Company) から出版された——、次には、この作品が出版される五カ月前、一七八八年の八月に、ウィリアム・ヒル・ブラウンの隣りに住んでいたセアラの夫ビアレズ・モートン (Perez Morton) が、セアラの妹フランセス・セオドラ・アプソープ (Frances Theodora Apthorp) を誘惑し、モートンの子を宿したフランセスが自殺

をする、という事件があり、明らかにウィリアム・ヒル・ブラウンはこの事件を『共感の力』の下敷きとして用い、あまつさえ、この事件を作品中に、義理の兄に誘惑された娘が自殺するというエピソードとして書き込んでいることが災いしたと考えられる。匿名の小説作品とは言え、娘の悲劇を書き立てられたアプソープ氏は激怒し、抗議を受けたブラウンは自分の作品の発売を中止して廃棄処分することに同意し、こうして『共感の力』は、作者不詳のまま、忘れ去られることになったのである。

ところで『共感の力』の著者問題について一応の結着を見るのは、ミルトン・エリスの論文「最初のアメリカ小説の著者」(Milton Ellis, "The Author of the First American Novel") (American Literature, Jan., 1933) の論証によるところが多いが、同論文によると、一八九四年になってボストンの若いジャーナリスト、ウォールター・リトルフィールド (Walter Littlefield) がこの小説作品の再出版の時機が到来したと考え、装丁の立派な再版を出し、その序文の中でリトルフィールドは、アメリカ文学に対する「著者」モートン夫人の貢献を誉めたうえで、また、同年の十月から、リトルフィールドと交際のあった雑誌編集者アーサー・W・ブレイリー (Arthur W. Brayley) は雑誌『ボストニアン』(The Bostonian) に『共感の力』の連載を始め、その連載に添えた序文で「著者」モートン夫人についての、誤りの多い情報を提供した。

ところが『共感の力』の連載が始まった直後、ブレイリーは

ウィリアム・ヒル・ブラウンの姪にあたるリベカ・トムソン夫人 (Mrs. Rebecca Thompson) がポストンに住んでいることを知らされ、トムソン夫人を訪問した結果、自分の誤りに気付き、『ポストニアン』の次の号(十二月号)に『共感の力』の本当の著者」(“The Real Author of *The Power of Sympathy*”)と題する論説を挿入して、著者についての訂正を行ない、そのあとウィリアム・ヒル・ブラウンの名のもとに連載を続けている。

エリス論文は、ブレイリーの伝えるトムソン夫人の証言を検討して、五つの観点からトムソン夫人の証言は信頼に値するものであるとし、『共感の力』の作者がウィリアム・ヒル・ブラウンであった、と断定している。なお、それ以後の論文には、リチャード・ウォルサー「最初のアメリカ小説補遺」(Richard Walsler, “More about the First American Novel”) (*American Literature*, Nov., 1952) や、シモン・R・ツイアーズ二世「『共感の力』著者問題のあらゆる検証」(John R. Byers, Jr., “Further Verification of the Authorship of *The Power of Sympathy*”) (*American Literature*, Nov., 1971) などがある。今や『共感の力』の作者がウィリアム・ヒル・ブラウンであることは、疑いの余地のないところとなった。

さて、ウィリアム・ヒル・ブラウンは一七六五年にポストンで生まれたが、その生涯については殆ど知られておらず、わずか二十七歳で夭折していることから、病弱であったと推測され、法律家を志していたらしくはあるが、病気で臥せっている時間

をもてあまして文筆に手を染めるようになったものと思われる。そして生前、二流の詩人、劇作家としてその名は知られていたが、『共感の力』と同巧異曲の小説と言われる『アイラとイザベラ』(*Ira and Isabella*) が作者名を明記して一八〇七年に死後出版されたものの、作家としてのブラウンの名声を確立するには至らず、上述したように、ブラウンが『共感の力』の作者であることも明らかにされないまま、その名は長いこと忘れられていたのであった。

それではこれから、「アメリカ最初の小説」という栄誉を与えられることになった『共感の力』について、具体的な検討を加えてみたいと考えるが、この作品が書かれた頃の、独立後間もないアメリカの文学状況を知るための一助として、一九六一年に『共感の力』のリプリント版を編集したハーバート・ブラウンの論文「十八世紀アメリカ演劇における感受性」(Herbert R. Brown, “Sensibility in Eighteenth-Century American Drama”) (*American Literature*, Nov., 1962) の冒頭の一節を引用しておきたい——

「芝居」や「ロマンス」のほうが「イエスの物語り」よりも読まれている、というのが十八世紀のモラリストの歎きであった。「道徳的訓話」というふれこみの芝居や「事実に基づく道徳的物語り」らしく偽装した小説が、これら二つの文学形式が発達する際に蒙った共通の影響を指し示している。わが国の小説家はもとより、わが国土着の劇作

家は、教訓的で感傷的な作品をお手本に頼って、そのインスピレーションを得ようとした。

たしかに植民地時代からアメリカでは、娯楽としての読書は避けるべきものとされ、とりわけ小説作品は若い女性を道徳的に墮落させる惧れがあると見られて、排斥される傾向があった。しかし十八世紀も後半に入ると、「事実に基づく道徳的物語り」らしく偽装した小説作品が盛んに読まれるようになった。折しもイギリスでは、サミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson) (一六八九—一七六一) によって代表される「書簡体小説」(“epistolary fiction”) がその全盛期を迎えており、リチャードソンの代表作『パメラ、もしくは報いられた美德』(Pamela, or Virtue Rewarded) (一七四〇) や『クラリッサ、もしくは若い婦人の物語り』(Clarissa, or the History of a Young Lady) (一七四七—一七四八) がアメリカに輸入されて、そのリプリント版は版を二十回も重ねるほどの売れ行きを示した。

〔因みに、アメリカでサミュエル・リチャードソンの作品は、小説というよりも道徳的教訓を与える書物として受け入れられ、聖職者ですらもこれを読み、ジョンサン・エドワーズ (Jonathan Edwards) (一七〇三—一七五八) もリチャードソンの『チャールズ・グランディソン卿』(Sir Charles Grandison) (一七五三—一七五四) を読み、時間を空費したとは思わなかった、と言われる。また、フィラデルフィアには早くからリチャードソンの作品が紹介されており、ベンジャミン・フランク

リン (Benjamin Franklin) (一七〇六—一七九〇) は、『パメラ』をその出版四年後の一七四四年に自分の印刷所でリプリントしている。⁽²⁾

小説作品として『共感の力』は、「連邦コロンビア〔アメリカ合衆国〕の若い婦人たちに、誘惑の原因とその致命的な結果をつまびらかにすることを意図して……その友であり卑しき僕たる著者により、尊敬の念と、誠意をもって献呈された」ものであるが、小説の形で若い女性の読者たちに、不身持ちの男たちの誘惑から身を守るべきことを教えようとする、もつともらしい意図を表明している点からも、また、六十五通の手紙をならべた「書簡体小説」であるという、その構成の点からも、リチャードソンの作品の模倣もしくは二番煎じと言うほかはない代物であるが、あるいは、イギリスからの独立を実現したばかりのアメリカのナショナリズムの高揚の中で、イギリス小説の輸入に反対する声が強まり、アメリカ人自身の手になる小説作品の出現が待望されるようになり、これを受けて若いブラウンが青年らしい義侠心からその待望に自ら答えようとしたのかも知れない。そして折しもブラウンの隣家で起こったスキャンダラスな事件は、人々の耳目を集めるのに恰好な小説作品の素材となるはずであった。そこでブラウンは、『共感の力』の「まえがき」の中に、

特定の悪徳をつまびらかにせず、特定の美德も推奨しない小説の場合は、女性の読者としては娯楽を見出すことは

あっても、読み終えたところで、いかなる観念も心に刻まれることはあるまい。従つてそういう小説は、実害はないにせよ、利するところもない。

我々の前に置かれたこれらの手紙については、こうしたいづれの側の誤りも避けられていと申しておく必要がある——誘惑の危険な結果は露わにされ、女性教育の利点は、はっきり述べられ、推奨されている。

と書き、『共感の力』が興味本位の小説ではないと断つた上で、その実、当時の読者の間で人氣のあつた「誘惑」(“seduction”)、⁽⁴⁾「近親相姦」(“incest”)、⁽⁵⁾「自殺」(“suicide”)などのテーマを『共感の力』の中に取り揃えて大向こうをうならすことを狙つたものと見られる。それがモデル問題で躓いて、作品はすんでのところまで抹殺、作者名も誤まって伝えられるという憂目を見るに至つたことは、上述した通りである。

つぎに『共感の力』を構成している六十五通の手紙について簡単な解説を試みることにするが、これらの手紙は都合七人の人物の間で取り交わされたもの、という設定になっている。その配列は一応、書かれた順序に従つて見るとよいが、数の多いものから紹介してみると、先ず、『共感の力』の事実上の主人公と見てよい、ポストンに住む青年ハリントン (Harrington) がその友人ジョン・ワージー (John Worthy) に宛てて書いた手紙が二十七通、ハリントンの妹マイラ (Myra) が精神

上の指導者として仰いでいるイライザ・ホームズ夫人 (Mrs. Eliza Holmes) から、そのマイラに宛てて書き送られた手紙が九通、逆にマイラがホームズ夫人に宛てて書いた手紙が七通、ハリントンの恋人ハリオット・フォーセット (Harriot Fawcett) がマイラに宛てて書いた手紙が五通、ワージーがマイラに宛てて書いた手紙が四通——ワージーとマイラは婚約している——、ハリントンの父 (Harrington, Sr.) がホームズ夫人の義父ホームズ牧師 (Rev. Holmes) に宛てて書いた手紙が三通、ハリントンが恋人ハリオット宛てに、また、ワージーがホームズ夫人宛てに書いた手紙が、それぞれ二通、そしてハリオットが恋人ハリントン宛てに、また、マイラがハリオット宛てに書いた手紙がそれぞれ一通である。

以上のような手紙の構成と組み合わせとから、『共感の力』の梗概らしきものを抜き書きするとすれば、それは以下のようになる——

ポストンに住む青年ハリントンは、親しくなった女性ハリオット・フォーセットとの結婚を望んでいるが、なぜかハリントンの父は、二人の結婚に反対している。ハリントンにはジョン・ワージーという親友があり、ハリントンは何事によらずワージーの忠告を有難く受け、ハリオットとのことでも、ワージーに相談をしている。また、ハリントンにはマイラという妹があり、マイラは現在、ワージーと婚約中である。なお、マイラは、今は未亡人で亡夫の両親——牧師夫妻——の家に同居して

いるイライザ・ホームズ夫人を精神的な指導者と仰いで、その助言を受けている。

ところでホームズ夫人も、ハリントンとハリオットとの結婚に反対している。その理由は、ハリントンとハリオットとが実は異母兄妹であるためであって、ホームズ夫人はマイラ宛ての手紙の中でハリオットの生い立ちを明かす。それによると、ハリオットの母はマライア・フォーセット (Maria Fawcett) と言い、マライアは家が没落したこともあって、すでに妻子もあつたハリントンの父の誘惑に負け、不義の関係を結んでハリオットを生み、その後まもなく捨てられて死亡した、ということであつた。

やがてハリントンとハリオットとが結ばれる日が近づく。ハリントンの父は、ハリントンがハリオットを実の妹であるとは知らずに妻とすることによって、近親相姦の罪を犯すことになるのを恐れ、ハリントンに真相を知らせてハリオットとの結婚を断念させようと考え、友人に依頼して匿名の手紙をハリントンに送り、ハリオットとの関係を知らせる。

このことを知つたハリントンとハリオットは衝撃を受け、ハリオットは心身共に衰弱して死亡し、ハリオットの死に接して絶望感を深めたハリントンは、ピストルで自殺をする。ハリントンがワージイ宛てに書いた最後の手紙は、封印もせず、テープの上に置かれ、その傍らにはゲーテの『若きウェルテルの悩み』(The Sorrows of Werter) (sic) [Goethe, Die Leiden des jungen Werthers] (一七七四) が一部置かれてゐた。

この物語りのいわば「劇中劇」、また、この物語りの結末を暗示する伏線となつてゐるエピソードが、フランセス・セオドラ・アプソープの悲劇をそっくりそのまま書き込んだと見てよいオフイリア・シェパード (Ophelia Shepherd) の悲劇であり、このエピソードは、なんとハリオットが旅先きのロードアイランドで聞かされた話として、マイラ宛てのハリオットの手紙——「手紙二十一」「手紙二十二」「手紙二十三」——の中で紹介されている。ハリオットの手紙によると、ハリオットがその同伴者フランシス夫人 (Mrs. Francis) の従姉妹にあたるマーティン夫人 (Mrs. Martin) の家を訪れたところ、マーティン夫妻が悲痛な面持ちをしてゐる。そこでフランシス夫人が事の次第を聞き出す、それによれば、マーティン夫妻が結婚して間もなく、マーティン夫人の妹で、ヨーロッパ帰りの美しいオフイリアが訪ねて来て、義理の兄マーティンはオフイリアの美しさの虜となり、手練手管を弄してオフイリアをかどわかし、オフイリアはマーティンの子を生む。激怒したオフイリアの父親は、当事者たちを集めて一切を明るみに出すことを図り、父親を思い留まらせようとしたオフイリアは、絶望のあまり毒を仰いで自殺をした、というのである。

ハリオットは、このオフイリアの悲劇を「人間の心の邪悪さと墮落状態の憂鬱な姿を示す出来事」(“an incident which exhibits a melancholy picture of the wickedness and depravity of the human mind”)と呼んでゐるが、ハリオットの伝

えるオフィリアの悲劇は、実はハリオット自身の誕生という形ですでに生起していたし、やがて形を変えてハリントンとハリオットの身の上に生起することになる。しかしながら、ハリントンとハリオットの悲劇は、二人が与り知らぬところで用意されていた理由によるものであり、二人はその父親が蒔いた種の実を刈り取る破目になっただけのことであって、二人が異母兄妹であることを知らずに愛し合うようになったことをもって二人を責めるわけにはいかない。従って作者ブラウンとしては、オフィリアの悲劇と、その悲劇を増幅するものとなるハリントンとハリオットの悲劇を語ることによって、そのような悲劇の原因となる「人間の心の邪悪さと墮落状態」の危険性を若い女性の読者たちに訴えようとした、と考えられるが、それにしても、この作品のタイトル「共感の力」およびサブ・タイトル「自然の情の勝利」の真意が理解しかねるところである。

そこで、ここに一つの仮説として、ブラウンはアダム・スミス『道徳情操論』(Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*) (一七五九) から「共感」の原理について学んでいたのではないかと想定してみたい。この書物がアメリカでどのように読まれたかについては、その筋の専門家の御教示を待つほかないが、全く単純な事実として、『道徳情操論』はブラウンが生まれる六年前に出版されていて、ブラウンが生前この書物を読んだ可能性は充分あり得ることであるし、これはブラウン死後のことになるが、一八一九年に、ハーバード大学で宗教、道徳哲学などを講じたリヴァイ・フリズビー教授 (Levi

Frisee) (一七八三—一八二二) が『道徳情操論』を書評して、「アメリカ文学の歴史の上で記憶すべき出来事」の一つとなつた、という事実がある⁽¹⁰⁾。

周知のようにアダム・スミスは、『道徳情操論』の第一部、第一章「共感について」(“Of Sympathy”)において、人間の本性に根ざすものとして「共感」能力を重視し、「共感」をもって近代市民社会の人間関係の原理としたが、ブラウンは、『共感の力』の中でハリントンがハリオットを腹違いの妹であること知らずに愛するようになったについては、アダム・スミスの言う「共感」とは必ずしも同じではないにせよ、そこに「共感」の力が働いていた、と考えており、そのような考えをハリントンの父にホームズ牧師宛ての手紙の中で述べさせている——

手紙 四十二

ハリントン氏からホームズ牧師に。

ボストン。

よくご存知の通り、私はマライアと契りを結び、その不義の結果、娘ができました。それ以来、十六年の歳月が経過し、お蔭をもちまして娘はフランシス夫人のもとに暮らし、さらにつけ加えさせていただけば、日に日に美しさが

増し、あらゆる好ましい教養も増しております——しかし私達人間の行動の動機となる偉大なる源泉を調べたり、共感の働き（“the operation of Sympathy”）を説明したりすることなど、どうしてできましよう——どうして、おこがましくもできましよう——私の息子は、八週間ほど家に帰っておりません間に、たまたま娘を見かけて、これは自然の情の勝利（“the Triumph of Nature”）を全うすることになるのですが、娘を愛してしまつたのです。息子は、今まさに結婚——続けましようか！——実の妹と結婚しようとしております！——一見偶然的な事情からこの重要な事柄が明らかになりました——私は急いで、この近親相姦を防ぐうと思ひます——私が自分で自分自身の不幸をつくり出したのだ、と私を非難なさらないで下さい——「これは、きみの放蕩の結果だ」と、あなたは仰言るでしよう——「これは、きみの姦通の結果だ」と——いろいろと思ひめぐらすことは控えて下さい、わが友よ——私の心は警告ぐらいのことはしてくれまます——私の心は妙にかき乱されていきます！

頓首！
(1)

つまり、ブラウンはアダム・スミスの「共感」の原理を男女相愛の原理として捉え直し、ハリントンが異母妹ハリオットを愛するようになったのは、異母兄妹なるが故に、二人だけの間に呼応し合うもの、お互いに共感し合うものを感じたからであ

り、二人の結婚はタブー視される近親相姦となることから避けるべきものとしながらも、それは人間としての自然の情の、当然、赴くところであることを、読者に納得させようとしたのではなからうか。

最後に、アメリカ最初の小説『共感の力』は、アメリカの最初の小説が書かれた頃のアメリカの文学状況に何がしかの光を投ずる作品である点においても貴重である。当時のアメリカの子女の間では、イギリスから輸入された書物が読まれていたが、ホームズ夫人はマイラに宛てた手紙の中で、それらの書物について次のように述べている——

手紙 二十九

ホームズ夫人からマイラに。

ベルヴェーリ。

わたしは時に、あなたに読むように薦める書物が必らずしもアメリカの婦人の状況に適応しないことを知って恥じ入っています。……

「ある上流婦人の、子供たちへの忠告」と題する小さな著作を送ります。……わたしはこれを小説としてではなく、心の言葉を話し、わたしたちが、わたしたち自身、社会を

して神様に負うている義務を諄々と教える著作として推薦するのである。

教訓的なエッセイは、必ずしも若い婦人たちの注意を惹くことができるとは限りません。わたしたちは、エッセイストの凝った教えから逃れて、小説家の快活な物語りととびつきます。真実と虚構の相違を見分けられるように心を憤らしておきなさい。そうすれば、思考の妥当性と正當さを判断できるようになるでしょう。また、面白い物語りの華美な装いにまどわされて、誤った意見をもつことがないようにしなさい。そうすれば最も有益な教訓を引き出すことができるでしょうし、あなたの読書の目的も十分に達成されるでしょう……⁽¹³⁾

また、同じくマイラ宛てのもう一つの手紙——「手紙三十」——でホームズ夫人は、イギリスの小説や雑誌の影響でアメリカの学識のある婦人たちが時に嘲笑されることを歎き、そのような才女の手になる作品がアメリカの文学に殆ど無いことを残念がっている⁽¹³⁾。もちろん、これらの手紙は、虚構の手紙であるが、それらを通じて当時のアメリカの子女がイギリスの小説類を「小説としてではなく」と称しながら、そう称することによって実は逆に「小説として」読み耽ったらしいこと⁽¹⁴⁾、また、それらのイギリスの小説類に必らずしも満足していなかったこと、そしてアメリカ人自身の手に成る小説の出現を待望してい

たことなどが窺い知られるのである。さらに、『共感の力』の梗概を紹介した時にも触れておいたように、ゲーテの『若きワエルテルの悩み』が、あるいはすでに英訳の形で、当時のアメリカで読まれていたことも実証できるなど、アメリカ最初の小説に関する研究から得られるものは、決して少なくない筈である。

(1) ブラウンの伝記的事実として知られるものは実に寥々たるものであり、現在までのところ、わずか一通だけ現存していることが確認されているブラウンの手紙を紹介・解説したジョン・R・バイアーズ二世は、一八三二年にボストンで出版された『アメリカ伝記・歴史辞典』(*An American Biographical and Historical Dictionary*)のブラウンに関する記述を引用しているが、それには「ブラウン、ウィリアム・ヒル、詩人、一七九三年九月二日、二十七歳で、法律を勉強していたノース・カロライナ州マリーブリーズバラ(Murfreesborough, N. Carolina)で死亡」とある。また、四カ月を越える闘病生活の様子を伝えるブラウン十八歳の韻文の手紙からは、ブラウンが幽霊のように瘦せ細り、頭は一方にかしぎ、首はすっかり歪んだ、小柄な体格であったらしいこと、また、機智に富んだ人物であったらしいことが想像される。Cf. John R. Bayers, Jr., "A Letter of William Hill Brown's" (*American Literature*, Jan., 1978)

(2) Cf. Fred Lewis Pattee, *The First Century of Amer-*

ican Literature 1770—1870, p. 82.

- (3) *The Power of Sympathy* (The New Frontier Press, 1961) に写真印刷で挿入された初版本の献呈の辞による。
- (4) *Ibid.*, p. xix.
- (5) それぞれの手紙には、それが書かれたとされる地名は明記されているが、日付けはつけられていない。
- (6) 明らかた、'Francis' は 'Frances' の 's' である。
- (7) 同様に 'Martin' は 'Morton' の 's' である。
- (8) *The Power of Sympathy*, p. 35.

(9) この想定は、西川正身先生の御示唆に負うところが多い。「私とアメリカ文学」(『英語青年』一九六五年六月号) 参照。

- (10) Cf. Howard Mumford Jones, *The Theory of American Literature*, p. 136.
- (11) *The Power of Sympathy*, pp. 86—87.
- (12) *Ibid.*, p. 57.
- (13) Cf. *Ibid.*, p. 61.

(一橋大学教授)